

## アカデミーフランセーズは 英語がおすすめ

現代中国学部  
木島 史雄

ユーストンのホテルを出て Marchmont street を南へ。絵はがきを出そうと郵便局に立ち寄ったら、切手と一緒に「PAR AVION」と印刷したシールをくれた。航空便という意味である。何とも親切なことだとも思ったし、今どきはがきを船便で出す者もいないだろうとも思った。ひとまずそう考えて歩き出したが、このシールを受け取ったときの、中途半端なしっくりしない感じは消えなかった。地下鉄の駅のをきまできて、これがフランス語であることに気づいた。じゃあフランス語だとなぜ落ち着かないのだろう。

フランス人が英語を話さないというのはおおかた嘘である。少なくとも、彼らは気位が高いから話さないのだというのは、まず間違いなく嘘である。以前パリのカフェで、牛乳がほしくて、そう、カフェ・オ・レのレだからなあと思ってギャルソンに「レ・レ」と繰り返したら、「ミルク？」と確認されたことがあった。パリでは英語はかなり通じる。ではぎゃくに英国人はフランス語を使うだろうか。空港でも、地下鉄でも、わりあいと英語の表記だけですましているように思われる。発音するときの私の口の格好をみてでもあろうが、英語がわからないなら、じゃあフランス語はどうだと訊ねられたことは一度もない。よく噂になる「フランスでは英語が通じない」という話よりも、「英国ではフランス語が通じない」というほうが蓋然性は高いように私にはおもわれる。それで、ロンドンで出会った“PAR AVION”に奇妙な感

じを持つのであるに違いない。Russell Square の噴水の脇をとおりながらそう考えた。

大英博物館にはいると、長く続いていた改修工事もほぼおわって、円形大閲覧室の周りに屋根がはられ、ずいぶん様変わりしていた。アッシリアのレリーフを見たあと、エトルリア文化の展示室へ行こうと思ったが、毎度の事ながら行き方がわからない。館員に尋ねたが、「そんなの知らないよ」という返事である。「ローマより前のイタリアの文明で…」と説明したら、それなら71か、72号室のへんだよきつと、と言う。彼らは一日中、「ナントカはドコ？」式の質問にさらされているのだろう。しかもあまり整っているとは言い難い英語で迫られることが多々あるであろうと、自らの例に照らして、考えた。仕事とはいえ、大変なことである。

ところで現在、英語は国際共通語である。ヨーロッパでも、母国語とするのはアイルランドと英国だけであるにもかかわらず、ほとんどの国でかなり英語は通じる。ウィーンから日本に小包を送るのにも、プレーメンの百貨店でチョコレートをかうのにも、ずいぶん英語の世話になった。英語は、それを母国語とする者同士および、英語圏人と他国人との間のコミュニケーション手段であるだけではなくており、もはやかれらの独占物ではない。独占物でないどころか、彼らに英語に対する優先的発言権はなくなっていると私は思う。国際共通語とは、その言葉を母国語としない者同士のコミュニケーションにおいても、その言語が用いられるということであろう。かつてラテン語は西欧学術いっばんにおける国際共通語であったし、ドイツ語は近代医学における国際共通語であった。フランス語にも、外交における国際共通語であった時代があり、件のはがきに“PAR AVION”と記されるのは、フランス語が万国郵便条約の公用語であるからにほかならない。

ところでそれまで民族言語であった英語が、あるとき国際共通語になると宣言した。最初は、世界中の誰も彼もが自らの言葉を話してくれると喜んだかもしれないし、我が国力を持ってすればそ

れくらいは当たり前だと考えたかもしれない。しかしかれらは、自分たちの言葉が国際共通語になるということの功罪を十分に考えたのであろうか。

承知の上でこの選択が行われたのであるなら、英語圏人とフランス人の間で、自国語についての意識が大いに異なっていたことは確かである。フランス人は、フランス語を自らの支配下に引き続き、フランス語の純粋性をまもる、すなわち訳のわからぬ奴らにフランス語を勝手に使われてフランス語が乱れてゆくことを防ぐために、フランス語を国際共通語にしなかった。いっぽう英語は国際共通語になり、その裏返しとして必然的に、この言葉を母国語とするアイルランド人および英国人の、英語への優先的発言権は放棄された。すなわち、「英語ではこうは言いません」という権利はもはや彼らには無い。実に世界中の人々は、英語に対して平等な発言権を持っているのであって、ブレイメンの百貨店員と私が、英語を用いて確実・的確にチョコレートの売買交渉をこなすことができたとすれば、それが英語圏人からみてどんなに奇妙な用法であっても、非難されるいわれはない。たしかに彼らは、英語による言語伝統・文学伝統を持っている。しかしそれは、あくまで「国文学」としての伝統であって、国際共通語である英語とは、直接的には関係ない。もしそこに彼らが口を挟む余地があるとすれば、伝統的用法を用いれば、英語によるコミュニケーションに揺れが無くなり、情報の伝達が正確で確実になるかもしれない、と意見を述べることができるにとどまる。

いっぽうフランス人は、積極的に英語を話すのである。外国人に向かって英語を話し、いい加減な英語でのコミュニケーションを厭わない。またそれによって、不純なフランス語が話されるのを防いでいる、少なくとも、一民族言語として、フランス語についてのあらゆる決定権をフランス人は持っているのである。すなわち正しいフランス語を決める機関として1635年に設立されたアカデミー・フランセーズ (Académie française) は、その権利を厳然として現在も、全世界に向かって保持している。フランス人は、気位が高く、そし



3月のパリの空

てフランス語を大事にしているからこそ、英語を話すのである。

ところで英語はこれからどうなってゆくのだろうか。私の専攻・研究する中国古典漢文は、上の二つの類型から言えば、英語に近い。文言文である古典漢文は、民族言語をこえて、東アジア全体の国際共通語であった。そして国際共通語としての歴史が古いこともあって、含意に富んでコンパクトで揺れないコミュニケーションを可能とし、それを保証するために、背後に大きな古典群を持っている。古典漢文によるコミュニケーション保証の仕組みと可能性を追いかけるのが私のしごとである。現代英語は、「英会話学校」的な当座のコミュニケーションを目指し、あらゆる用法を飲み込んで、融通無碍に変化してゆくのだろうか。それとも古典漢文のように、何らかの保証システム構築へと向かうのだろうか。ブルームズベリーの風に吹かれながら、そんなことを考えたのであった。